

夏期講習だより

第5号

文責 研修委員長 藤澤 和敏 (赤穂南小学校)

7月3日(木) 第4回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第4回読み合わせ 令和7年7月3日(木)

読み合わせ範囲 『西田哲学選集』第一巻「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部『善の研究』
第二編「実在」 第十章(実在としての神)

司会者: 片田 越先生(赤穂小学校) レポーター: 佐藤 重浩先生(赤穂南小学校)

【佐藤 重浩先生のレポートから】

1. はじめに

「哲学」と関わることになったのは、飯田市の学校に勤めていたとき、当時の校長から下伊那 哲学研究会へ誘われたことがきっかけである。上伊那に転勤となり、研究会からも離れたのであるが、下伊那時代の先生との再会もあり、哲学との縁も、時や場を超えてつながるのものであると感じている。

本講習への参加は3年目となる。『善の研究』の内容、西田先生の言わんとすることがなんとなく“分かったような”だが、細部を読もうとすると“まだまだ難しい”そんな状態である。レポートを書くにあたって、どんな言葉で表現したら良いか、苦慮しながらもよい落としどころが見つからないということが多々あった。

2. 実在としての神

「神」と聞くと、神話で語られるような、どこか擬人化された存在を連想するが、西田先生が指す「神」は、さらにその先にあるもののように考えられる。西田先生は「道徳」という言葉も使うが、宗教の規範としての道徳は、その根源がどこにあるかと考えると、より上位の道徳が存在する(創造主としての神が定義されると、それより上位の存在を求めるため)ことになるが、西田先生はこの点も認識としては違うものの、否定はしていないようである。

興味深いのは文中「然らば我々は直接経験の事実上において如何に神の存在を求むることができるか」という問いだ。この言葉の意味を、私は「『神』はいると仮定するものではなく求め続ける理なのではないか」と考える。やや強引ではあるが、いくつもの宗教で神の姿を具体的に描くことが禁止されるのも、「絵や像として表される物ではなく純粹経験によって知覚するもの」と考えているからだと推測することもできる。

如何にして神を求むるかという問いに戻すと、先の章で言われた「矛盾を内在し、その衝突を繰り返す」ことが、大いなる精神・神への一致に至るための活動であると考えることができるのではないだろうか。教育の現場では、何がこれにあたるのか、体験を元に考えてみたい。

3. 道徳教育の中での大いなる精神の探求

この段では、道徳の神を「大いなる精神」と表現する。私たちが道徳の授業を行うとき、子どもたちの認識や価値観などに着目し、ズレを意識させることがある。小学5年生の「遊園地でのマナー」について扱った授業が印象的だったので取り上げたい。

『題材の概要: 遊園地のショーを見る場面、前にいた男性が子どもを肩車したため、後ろの人が見づらくなってしまったという出来事について。』

子どもたちは、「お金を払っていればルール違反をしても良いわけではない」「多少損をしてもルールは守るべき」という考えに行き着いた。だが、「でも自分が父親だったら、子どもになんとかして見せたいと思うかも」という、矛盾とも言える考えも生まれた。

最終的に全員の納得するような合意形成はされなかったが、探求という点から思い返すと、結論が出ない中で、子どもたちは「大いなる精神」を学んでいたのではないだろうか。他者への理解を深める活動(ひょっとしたら矛盾する新たな問いが生まれた瞬間が)が、子どもたちにとっての「大いなる統一」に近い

ものであれば良いと感じる。

4.おわりに

学校教育の中でも、様々な場に子どもたちの「大いなる統一」があるように思う。その瞬間を見逃さないようにアンテナを張っておくことが、難しくも大切なことと考える。

【グループ討議のまとめ】

A グループ

神はいるかいないかというものではなく、求め続けるものなのではないかという話が出た。（本日分の）テキスト後半にあるように、神は私たち情意と何ら関係ない物に感じられるかもしれないがそうではないという文や、他人と考えを合わせながらという部分について、私たちも統一活動を行ってきたが、結論はまだ出なかった。

B グループ

グループ内でまとまった統一まで行かなかったが、それまでの神の認識と異なる西田の指す神について、カントの神とどう違うのか話した。その中で、カントの神は数理や感動についてまで拡大をしている部分があるのかと感じた。神とは何かそれを求める心の動きが統一であり、その統一していく活動が神なのではないかとも感じた。また、子どもの合唱を聞いたときの心の動き、その感動の中にも神があるのではないだろうか。

C グループ

神って何だろうか。雲をつかむような中での話となった。個人的には、文中繰り返し書かれる「神である」という表現が分からなかったが、全知全能の神が私たちを操作しているわけではないと受けとれた。文末にあるが、神とは、自分たちが経験してきたことや育ててきている道徳心が、神という表現で示されているので、そういった気持ちの面を重視していくことが大切なのではないかと感じた。

D グループ

神とは何かについて、前回の資料にあった「一個人の意識ではなく、普遍のものである。だからこそ客観的な宇宙という世界が理解できる」というのが難しいと感じていたが、今日の話の中で、道徳という例が出されることで分かりやすかった。時代や国、地域などによって表す形は違うものの、私たちの心の根底にある「なんかいい」だったり良心みたいなものが普遍的な物として私たちの中にあって、そういうのを神というのではないかと思った。

E グループ

神というと、擬人化した神話的な神が出てきて、今回の部分は難しく感じた。その中で、神はいるとかいないとかではなく、求め続けるのが神なのではないかの話になった。また、給食の残食も話題になったが、神に言われたからという話でなく、意識しているわけではないが、自分の中で感じる「なんとなく気持ち悪いな」の感覚も、神なのではないかと感じた。

【唐澤 正吉先生より】

- ・今回の箇所は実在としての神についてである。自然と精神は本来であれば分けるものではないのだが、分裂しては統一していく中で、分裂した時に精神として現れるものである。本当は一つのことを指している。
- ・佐藤先生は、純粹経験としての神を、全知全能の神でなく、内なる神ではないかと言い、神とは何かについて考えていた。P162では、西田の考える神についての説明がある。純粹経験の事実から神を論理的に説明しようとしているが、西田の善の研究をしていた時期の特徴は神秘主義である。「小さき我々の胸の中にも無限の力が潜む」すなわち無限の統一力が潜んでいる。の記述に対し、佐藤先生は、これを「理」ではないかと解釈していた。P140の「人は皆宇宙に一定不変の理なるものがあって～」の部分、これは東洋的な思想であり、その理を信じて根拠としている。神を祈りや崇拜の対象として、超越的な世界に求めるのではなく、自己の内で神と一つになる神秘的な統一体験こそが宗教の最も深いものであるという考え方である。つまりは、超越性よりも内在性を重視する考え方なのである。今回の例で言えば、小なる自己から他人の考えを入れて統一する。これによって、少し大なる自己になる。これがどんどん大きくなり、もし最終的に宇宙的な大きさの統一力となったならば、これが神とも言える。それと同時に、自己の外部と同じように、自己の内面への広がりもあることに触れておきたい。
- ・終わりに、ピンチはチャンスである。困難を抱える現代の学校だからこそ、私たち教員が子どもや物事を見て感じ取る力を修練することが必要ではないだろうか。